

膜シンポジウム2024報告

実行委員長 滋賀医科大学 森田真也

膜シンポジウム2024を、2024年11月28日（木）～29日（金）の2日間にわたり、JR新幹線米原駅から徒歩数分のところにある滋賀県立文化産業交流会館にて開催しました。膜シンポジウムは、1989年に第1回が開催され、今回で第36回を数えます。膜シンポジウムとしては、初の滋賀しかも湖北での開催ということで、参加者を集められるの不安ではありましたが、事前参加登録180名（会員93名、学生83名、非会員4名）と法人3社に加えて、当日にも13名（会員9名、非会員4名）と法人1社の方に参加登録していただき、合計193名と4社の大変多くの方にご参加いただきました。そして、特別講演2演題に加えて、口頭38演題とポスター81演題を発表していただきました。企業展示についても、4社から出展していただきました。成功裏に終わることができましたことをご報告申し上げるとともに、ご参加いただきました皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回の膜シンポジウム2024の主題は、“融合による創膜”としました。日本膜学会の特徴である異分野（人工膜・生体膜・境界領域）からの様々な研究者が垣根を越えて深く議論することで、各々の視点や技術が融合し、新たな“創膜”へと結びつくことを目的としました。

1日目の夕方に、特別講演1として中野 実先生（富山大

学）に「時分割中性子散乱によるリン脂質ダイナミクスの計測とペプチドを用いたリン脂質フリップフロップの促進」についての講演をしていただき、特別講演2として都留稔了先生（広島大学）に「ナノ/サブナノ多孔膜の創製、特性評価と膜プロセスへの展開」についての講演をしていただき、会場には多くの方が詰めかけ聴き入りました。これらの講演は、それぞれ生体膜と人工膜の領域において第一線で活躍しておられる中野先生と都留先生の研究のこれまでの集大成的内容で、非常に聴き応えのあるもので、感銘を受けられた方も多かったと思われま。一般口頭発表は、当初は発表15分+討論5分として募集を行いました。38演題もの多くの演題を申し込んでいただいたため、2日間の限られた時間の都合上、発表10分+討論5分に変更となりました。これまで、膜シンポジウムでは、人工膜・生体膜・境界領域の発表を分けずに一つの講演会場でを行い、十分な討論を行うことになっています。近年は、一演題あたり20分となっていました。私が初めて参加した膜シンポジウム2000のプログラムを確認しますと一演題あたり25分の時間がとられていました。今回は、残念ながら一演題あたり15分と短くなりましたが、議論は非常に活発に行われました。また、極めてタイトなスケジュールとなりましたが、座長の先生方の優れた采配により、ほぼ時間どおりにスムーズに進行できました。ポスター発表会場でも、大変賑やかに議論が交わされていました。特に、学生賞の対象となっていた学生の方は、多くの審査員から質問攻めに遭い、貴重な経験になったと思います。2日間の充実したプログラムで、当初の目標は達成できたのではないかと感じています。

1日目の特別講演の終了後、そのまま同会館内にあるカフェへ移動し、懇親会を行い、65名の方にご参加いただきました。懇親会では、膜学会会長の山口猛央先生（東京科学大学）からの挨拶と都留先生による乾杯の挨拶に加えて、2009年～2012年に会長を務められた半田哲郎先生に挨拶を



講演会場風景



特別講演 都留先生



特別講演 中野先生



懇親会 半田先生挨拶

していただき、場が和みました。恒例の三賞（参加登録・演題登録・要旨提出が早かったで賞）の発表があり、それぞれ上位の方には副賞として滋賀で有名なバームクーヘンを贈呈しました。また、懇親会でも、人工膜と生体膜の研究者の垣根を越えた交流があったものと思われま

す。実行副委員長の田中俊輔先生（関西大学）をはじめ、13名の先生に実行委員を務めていただき、運営にご尽力いただきました。滋賀医科大学の当研究室のスタッフに加えて、富山大学・徳島大学・大阪公立大学・関西大学からの参加学生に、道案内・受付・ポスターパネル撤収作業を手伝っていただきました。おかげさまで、2日間を通じて大きなトラブルはなく、開会式から閉会式まで円滑にシンポジウムを行うことができ、膜学会事務局の渡部恭吉様ならびにご協力いただきました皆様には改めて感謝申し上げます。

4年前の膜シンポジウム2020では、私の当時の上司である寺田智祐先生（現京都大学教授）が実行委員長を務められ、そのもとで運営に関わりました。その頃は、コロナ禍が始まった時期で、現地開催の予定からオンライン開催に変更となりました。今回は、もうコロナの影響も感じられない状況となり、無事に現地で対面の開催ができました。一方で、シンポジウムに付随して行われた理事会や産業部門委員会は、現地とオンラインのハイブリッド形式で行わ

れ、コロナ禍で培われた技術が活かされました。私が大学院生の頃、膜シンポジウムは毎年、京都大学薬学部の講堂で行われており、半田先生と中野先生の指示のもと、マイク係・タイムキーパー・照明係として運営を手伝っていましたが、当時は自身が実行委員長を務めることになるとは思ってもおらず、今回無事に開催することができたことに感慨深いものがありました。今回の膜シンポジウムで生まれた議論が、次回の年会ならびに膜シンポジウムに繋がり、“創膜”へと結びつくことを期待しています。

日本膜学会会長：山口猛央（東京科学大学）

実行委員長：森田真也（滋賀医科大学）

実行副委員長：田中俊輔（関西大学）

実行委員：赤松憲樹（工学院大学）、池田義人（滋賀医科大学）、潤井みや（滋賀医科大学）、太田誠一（東京大学）、大橋秀伯（東京農工大学）、岡本泰直（神戸大学）、中尾裕之（富山大学）、長尾耕治郎（京都薬科大学）、中川敬三（神戸大学）、長澤寛規（広島大学）、中瀬生彦（大阪公立大学）、廣田雄一郎（名古屋工業大学）、森山教洋（広島大学）